

## 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究（3）

～大学院における心理臨床教育としてのスーパーヴィジョンに求められること：スーパーヴィジョンでのよかった体験の質的分析より～

井出尚子・田淵尚子・箕浦亜子・上村恭子・小海富美代・須佐祐子

明星大学 心理相談センター

**キーワード：**心理臨床家の職業的発達、大学院における初学者へのスーパーヴィジョン、スーパーヴィジョン体験でのよかった点

### 要約

これまで著者らは、日本語版スーパーヴァイジー職業的発達尺度（SLQ-R）を作成し、大学院におけるスーパーヴィジョンの体験で「よくなかった点」の質的検討を行ってきた。本稿では、大学院におけるスーパーヴィジョンの体験で「よかった点」に関する自由記述を、質的に分析を行い、大学院における初学者へのスーパーヴィジョンに求められることについて考察することを目的とする。調査は臨床心理士指定大学院の在学および修了後10年以内の者に対して実施し、「よかった点」について164名の自由記述による回答を得た。それらの回答をKJ法によって分析し、その結果とこれまでの研究結果を合わせて考察した。

### I. 問題と目的

明星大学心理相談センターは、日本臨床心理士資格認定協会に認められた第一種指定大学院である明星大学大学院人文学研究科心理学専攻臨床心理学コースの教育研修機関として、また、地域に貢献する相談機関として2001年に設立された。設立以来、大学院修了生は160名を超え、様々な心理臨床の現場で活躍している。筆者らは、相談業務に携わるのと同時に、当センターで心理臨床の実習を行う大学院生のスーパーヴィジョンも主要な業務として行っている。

近年、臨床心理士の社会的認知度が上がり、臨床心理士の数も急増し、その質の維持および向上をどのように確保するかが大きな課題となっている。その中で、臨床心理士を目指す大学院生をいかに養成していくかも注目されている課題である。山中(2009)が、事例検討とスーパーヴィジ

ョンは臨床家養成における両輪であり、臨床の根幹を支える営みであると述べているように、臨床心理士の教育と訓練において、スーパーヴィジョンが要であることは多くの臨床家が認めている。特に、「初心者の最初の二年間くらいのスーパーヴィジョンがそのセラピストの命運を大きく左右することがある」と小此木(2001)が述べるように、とりわけ初学者にとってのスーパーヴィジョンの影響は大きい。心理臨床家としては初学者である大学院生にとって、今後の専門家としての成長を見据えて、どのようなスーパーヴィジョンがより有効であるのかを考えることは、筆者らにとって必要なことであると同時に、社会にとっても重要なことであろう。

しかし、日本におけるスーパーヴィジョンについての研究は、まだ始まったばかりの感がある。海外において、スーパーヴィジョンの研究が数多

く為されているのに対し、日本では、スーパーヴィジョンに対する著明な臨床家の考えを述べたものや、現在の日本におけるスーパーヴィジョンの実態調査にとどまっておき、とりわけ実証的な研究は少ない。

そこで、筆者らは、まず、心理臨床家の専門家としての職業的発達とスーパーヴィジョンの関係を調べるべく、McNeill, et al.(1992)によって開発された「スーパーヴァイザー職業的発達尺度(SLQ-R: Supervisee Levels Questionnaire-Revised)」の日本語版の作成を試みた(上村ら, 2013)。日本語版スーパーヴァイザー職業的発達尺度(SLQ-R)は、「自他の気づき」「自律性」「モチベーション」の3つの下位尺度に分けられ、訓練経験が増える程、高くなることが分かった。

その調査の一環として、大学院におけるスーパーヴィジョンの体験で、よかった点、悪かった点について自由記述で回答を求めており、次なる研究として、悪かった点の質的検討を行った(箕浦ら, 2014)。大学院におけるスーパーヴィジョンでのよくなかった点は、KJ法により、「スーパーヴィジョンに関して不足があった」「スーパーヴァイザーの態度がいやだった」「人としてスーパーヴァイザーと合わなかった」「スーパーヴィジョンをとりまく体制への不満があった」「スーパーヴァイザーの権威の悪影響があった」「スーパーヴァイザーとかみ合わなかった」「スーパーヴィジョンを受けたことで悪影響があった」の7つのカテゴリーに分類された。

本稿においては、大学院におけるスーパーヴィジョンで「よかった点」に関する自由記述を、質的に分析し、これまでの結果も合わせ、大学院における初学者へのスーパーヴィジョンに求められることについて考察することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 質問紙

質問紙による調査を行った。質問紙の内容は以

下の通りであった。

#### (1) 基礎情報

性別、年齢、大学院教育年数、カウンセリングの経験年数、スーパーヴィジョンを受けた年数、大学院時代に受けたスーパーヴィジョンの構造(誰に受けたか、スーパーヴァイザーは選べたか選べなかったか、料金の有無)、現在の就業領域。

#### (2) 日本版SLQ-R

StoltenbergとMcNeill(1992)が作成したSLQ-Rの日本語版を作成した。

本稿では大学院時代に受けたスーパーヴィジョンについて考察するため、日本版SLQ-Rについては分析対象から除外した。なお、日本版SLQ-Rについては、上村ら(2013)が考察している。

#### (3) 大学院時代のスーパーヴィジョン経験の満足度

大学院時代に受けていたスーパーヴィジョンについて、「技法の習得」「ケースの見立てや理解」「自己理解」「臨床の仕事への理解」「心理的サポート」の5項目の満足度を、それぞれ7件法で回答を求めた。

#### (4) 自由記述

大学院在学中に受けたスーパーヴィジョンの体験で「よかった点」「悪かった点」について、それぞれ自由記述を求めた。

## 2. 調査協力者

協力依頼対象者は現在大学院の修士課程(博士前期課程)在学者および修士課程修了後10年以内の者とした。筆者らの所属する明星大学大学院人文学研究科臨床心理コース在學生と修了後10年以内の修了生、および日本臨床心理士資格認定協会が認証している第一種指定大学院で調査協力依頼を承諾してくれた16校の在學生と修了後10年以内の者を対象に調査を行った。

### 3. 調査手続き

質問紙、調査依頼書、返信用封筒を同封したものを1セットとし、本学在学学生および修了生には個別に配布・郵送し、他大学については学内実習機関や教員宛に郵送し、調査協力者に配布してもらった。回収は、調査協力者個人が返信用封筒を用いて郵送する形をとった。

### 4. 調査時期

質問紙配布時期は2012年12月から2013年2月、回収時期は2013年1月から2013年3月であった。

### 5. 質問紙の回収結果

回収は210通であった。210通のうち、自由記述の「よかった点」に記述があった164名の回答者内訳を以下に記載する。

#### (1) 質問紙回答者の内訳

性別の内訳は、男性35名、女性129名であった。年齢は平均29.86歳、レンジは22歳～62歳であった。学歴は、大学院修士課程在学者80名、修了者が83名(回答なし1名)であった。うち、修士1年在学者14名、修士2年以上在学者66名、修士課程修了者のうち博士課程在学者10名であった。

現在の勤務形態については、①常勤のみ9名、②常勤と非常勤11名、③非常勤のみ78名、④現在勤務していない50名(修士課程在学者を含む)、無回答16であった。

現在の就業領域は、①保健・医療57名、②福祉36名、③教育82名、④大学42名、⑤司法3名、⑥産業11名、⑦私設13名であった(複数回答あり)。

#### (2) 臨床経験について

勤務経験年数のレンジは0～9年9ヶ月、うち1年以内17名、1～3年25名、3～5年21名、5年以上19名であった(回答なし82名)。

カウンセリングの経験期間のレンジは0～12年10ヶ月、うち1年以内43名、1～3年58名、3～5年19名、5年以上42名であった(回答なし2名)。

#### (3) スーパーヴィジョンの経験について

個人スーパーヴィジョンを受けた期間のレンジは0～12年10ヶ月、うち1年以内53名、1～3年62名、3～5年15名、5年以上19名であった(回答なし15名)。個人スーパーヴィジョンを受ける平均頻度は月0.5回～月4回の回答があった。

グループスーパーヴィジョンを経験した期間のレンジは0～10年0ヶ月、うち1年以内21名、1～3年32名、3～5年9名、5年以上13名であった(回答なし89名)。グループスーパーヴィジョンを受ける平均頻度は月0.5～月4回であった。

#### (4) 大学院時代に受けたスーパーヴィジョンの構造

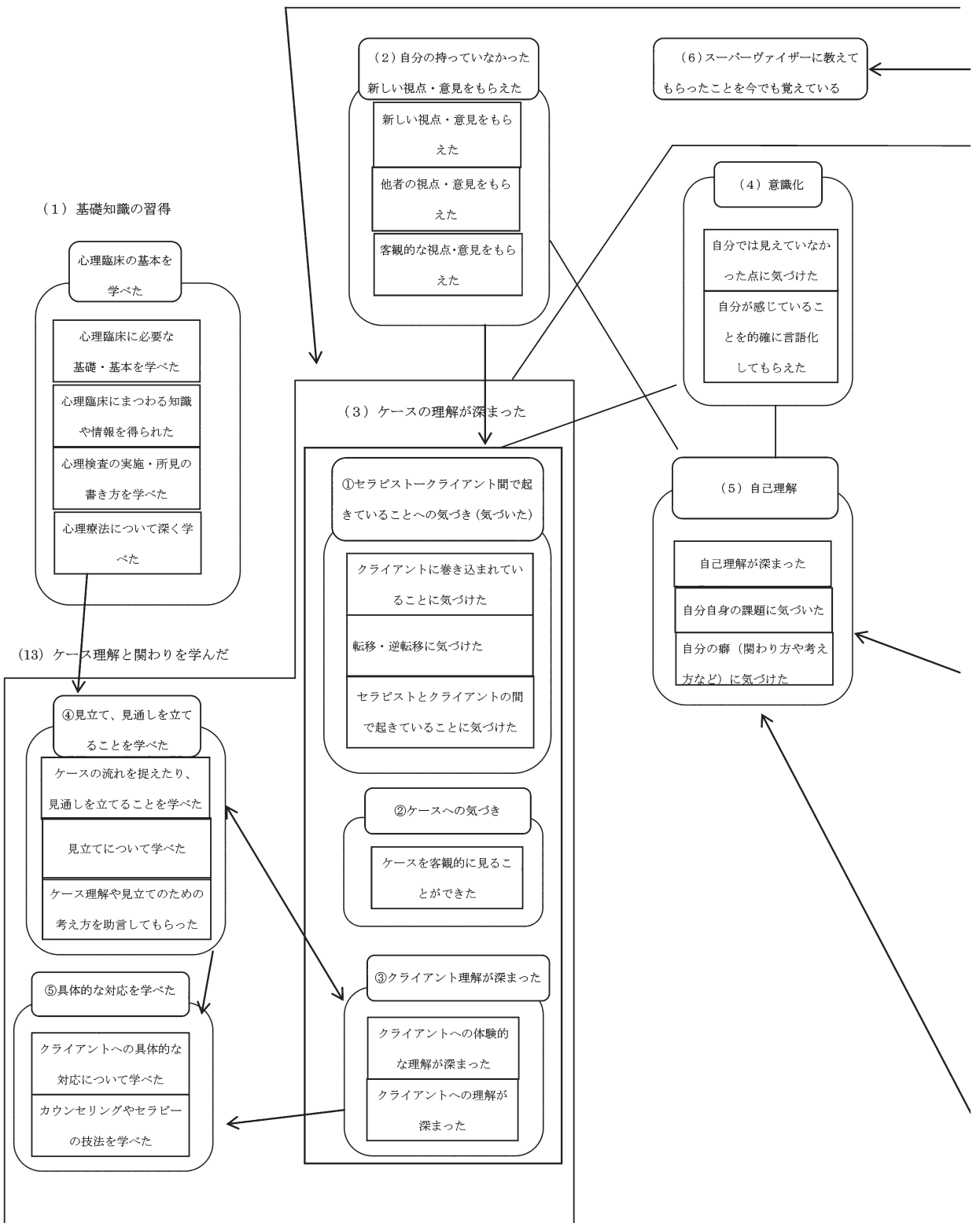
大学院時代にスーパーヴィジョンを受けたかどうかについて、受けた162名、不明2名であった。受けたと回答した162名のうち、スーパーヴァイザーの立場は、学内では教員99名、付属施設の相談員(臨床心理士)85名、その他(OBなど)6名であった。外部機関で受けたと答えたのは37名であった(複数回答あり)。

スーパーヴァイザーを自分で選べたと答えたのは58名、選べなかったと答えたのは113名であった(複数回答あり)。料金の有無について、有料30名、無料139名、有料の場合の料金は2500円～20000円であった(複数回答あり)。

#### (5) スーパーヴィジョン経験の満足度

大学院時代にスーパーヴィジョンを受けたと答えた162名の回答を分析した。

「技法の習得」平均5.01、標準偏差1.42、「ケースの見立てや理解」平均6.28、標準偏差0.93、「自己理解」平均5.39、標準偏差1.38、「臨床



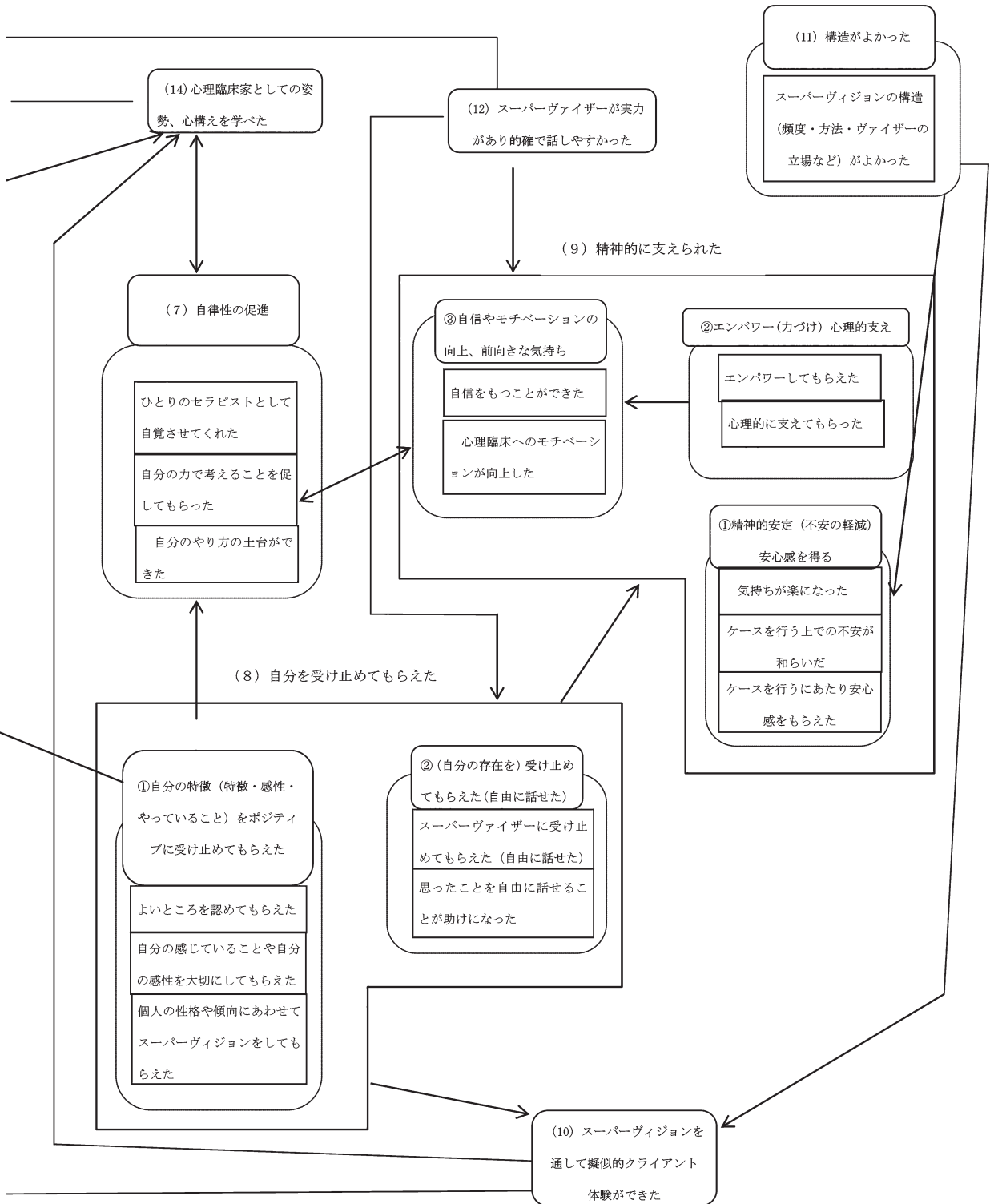


図 1. スーパービジョン体験で良かった点

の仕事への理解」平均 5.52、標準偏差 1.20、「心理的サポート」平均 5.87、標準偏差 1.14、であった。

## 6. 自由記述の分析方法

大学院時代のスーパーヴィジョン体験における「よかった点」に記述のあった 164 名分の自由記述を KJ 法(川喜多, 1967/1970)の手続きにもとづいて分析を行った。

まず、それぞれの記述を一区切りの内容ごとに切り分け、385 の内容となった。これらを同様の意味と思われるグループごとに分類し、43 のグループができた。さらにそのグループを大きなグループへと分類していき、14 グループにまとまった。これらのグループ同士の関係を把握するために、A 型図解化の手続きにもとづいて空間配置し(図 1)、さらに B 型文章化の手続きに基づいて文章化した。

これらの作業は、筆者ら 6 名の臨床心理士が協議を重ね、意見が一致するまで吟味、検討を重ねて行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 図解化

図 1 に示した図解となった。

大学院におけるスーパーヴィジョンでよかった点は、最終的に以下の 14 のグループに分類された。

- (1) 基礎知識の習得
- (2) 自分の持っていなかった新しい視点・意見をもらえた
- (3) ケースの理解が深まった
- (4) 意識化
- (5) 自己理解
- (6) スーパーヴァイザーに教えてもらったことを今でも覚えている
- (7) 自律性の促進
- (8) 自分を受け止めてもらえた

- (9) 精神的に支えられた
  - (10) スーパーヴィジョンを通して擬似的なクライアント体験ができた
  - (11) 構造がよかった
  - (12) スーパーヴァイザーが実力があり的確で話しやすかった
  - (13) ケース理解と関わりを学んだ
  - (14) 心理臨床家としての姿勢、心構えを学べた
- 図解化では、これら 14 のグループにどのような内容が含まれているかを示している。また、各内容間での関連性を記号で表している。関連づける記号とその意味は、以下の通りである。
- : 関係あり  
 → : 生起の順、因果関係  
 <→ : 互いに因果関係あり

## 2. 文章化

図解化をもとに、14 のグループ間およびその内容の関連性を吟味しながら以下のように文章化した。

- (1) 大学院のスーパーヴィジョンの経験でよかったこととして、心理臨床の基本を学べたことがあげられた。その中には基本的な理解の枠組みや、セラピーの流れ、最低限の枠やルール、精神医学的な知識、必要な参考文献についての知識、心理検査の実施や所見についての実務的な知識、さらには心理療法についての普遍的な要素を学ぶことが含まれる。
- (13)-④ これらの基本を踏まえて、担当するケースで、その見立てをたて、見通し(ケースの流れ)を持つという実践につながっていく。
- (2) 自分の持っていなかった新しい視点、客観的な視点や意見を他者からもらうことで、
- (3) ケースへの理解が深まっていくのである。ケースへの気づき、セラピストクライアント間で起きていることへの気づき(クライアントにまきこまれていることに気づけた、転移・逆転移に気付けた)があり、クライアン

ト理解がより深まっていく（体験的理解が深まる）。(13)-⑤そのプロセスの中で具体的な対応も学んでいく。

(13) スーパーヴィジョンを通してケース理解とその関わりを学んでいく中で、(4)自分では見えていなかった点に気づき、あるいは、自分が感じていることを的確に言語化してもらうことで、自身の課題に気がつき、(5)自分の癖（関わり方や考え方など）に気がつくことで自己理解が深まる。

(10) 他にもこの自己理解を支える要因として、「スーパーヴィジョンを通して擬似的なクライアント体験ができた」ことがあげられる。この体験が成立するためには、(11)スーパーヴィジョンのふさわしい構造（頻度、タイミング、ヴァイザーの立場など）があることと、(8)スーパーヴィジョンの中で、自分の性格や傾向に合わせてスーパーヴァイズをしてもらえたり、自分の感じていることや自分の感性を大切にもらえ、良いところを認めてもらえたりすることで、スーパーヴァイザーに自分の特徴を受けとめてもらえたという要素や、思ったことを自由に話せたり、スーパーヴァイザーに見守ってもらえたりしたことで自分自身を受けとめてもらえたという要素が必要である。

また自分を受けとめてもらえた体験が、(9)精神的に支えられた体験に繋がる。ケースを行う上での安心感や不安の軽減また精神的に支えてもらいエンパワーされたことから自信を持つ事ができ、心理臨床へのモチベーションが向上する。このように精神的に支えられた要因としては、(12)スーパーヴァイザーが実力があり的確で話しやすかったといったスーパーヴァイザー側の要因もある。

自分を受けとめてもらえたり、精神的に支えられたりするという体験が、(7)ひとりのセラピストとして自覚させてくれ、自分の力

で考えることを促してもらい、自分のやり方の土台が出来たといった「自律性の促進」につながる。それはすなわち、(14)心理臨床家としての姿勢、心構えを身につけることであるから、(6)スーパーヴァイザーにとって「スーパーヴァイザーに教えてもらったことを今でも覚えている」というような大切な体験となっていく。

## IV. 考察

### 1. スーパーヴァイザーの職業的発達を促す要因

図解化で分類されたグループのうち、(3)「ケースの理解が深まった」、(4)「意識化」、(5)「自己理解」は、日本語版スーパーヴァイザー職業的発達尺度(SLQ-R)の下位尺度である「自他の気づき」に相当すると考えられる。また、(7)「自律性の促進」は同尺度の「自律性」に、(9)-③「自信やモチベーションの向上、前向きな気持ち」は「モチベーション」に、相当すると言えるであろう。では、スーパーヴァイザーの職業的発達を示すと考えられるこれらの要素は、一体何によって支えられるのか、図解化を基に分析していく。

まず、職業的発達を示すと思われる(3)「ケースの理解が深まった」、(4)「意識化」、(5)「自己理解」、(7)「自律性の促進」、(9)-③「自信やモチベーションの向上、前向きな気持ち」のグループに、「一」や「→」の記号でつながっているグループを確認し、「→」でつながるグループはそれを遡っていくことで、原因や生起の基を探っていく。それを箇条書きの文章にして以下にまとめる。

### 1. スーパーヴァイザー職業的発達尺度の下位尺度「自他の気づき」

#### 1-1. 「ケースの理解が深まった」を支える要素として

・「基礎知識の習得」を踏まえて、「ケースの見

立て、見通しを立てることを学べた」こと。

- ・「自分の持っていなかった新しい視点・意見をもらえた」こと。
- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」こと。

#### 1-2. 「自己理解」を支える要素として

- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ために、「自分の特徴をポジティブに受け止めてもらえた」こと。
- ・「構造がよく」、「スーパーヴァイズを通して擬似的なクライアント体験が出来た」こと。

#### 1-3. 「意識化」を支える要素として

- ・「ケースの理解が深まった」ことや「自己理解」と関連がある。

### 2. スーパーヴァイザー職業的発達尺度の下位尺度「自律性」

#### 2-1. 「自律性の促進」を支える要素として

- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ために、「自分の特徴をポジティブに受け止めてもらえた」こと。
- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ために、「自信やモチベーションの向上、前向きな気持ち」が得られたこと。
- ・「基礎知識の習得」ができ、「ケース理解と関わりを学んだ」ことで、「心理臨床家としての姿勢、心構えを学べた」こと。
- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ことから、「ケース理解と関わりを学んだ」ことで、「心理臨床家としての姿勢、心構えを学べた」こと。
- ・「構造がよく」、「スーパーヴィジョンを通して擬似的なクライアント体験ができた」ことで、「心理臨床家としての姿勢、心構えを学べた」こと。

#### 3. スーパーヴァイザー職業的発達尺度の下位尺度「モチベーション」

#### 3-1. 「自信やモチベーションの向上、前向きな気持ち」を支える要素として

- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」こと。
- ・「エンパワー（力づけ）、心理的支え」を得たこと。
- ・「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ために、「自分を受け止めてもらえた」こと。
- ・「自律性の促進」。

箇条書きの項目について見てみると、「基礎知識の習得」や「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ことから、「ケースの見立て、見通しを立てること」等の「ケース理解と関わりを学んだ」こと、「自分の持っていなかった新しい視点・意見をもらえた」ことは、教えることに重きをおいた教育的な側面と言える。

また、「スーパーヴァイザーが実力があるの確で話しやすかった」ために、「自分の特徴をポジティブに受け止めてもらえた」り、「自分を受け止めてもらえた」り、「エンパワー（力づけ）、心理的支え」を得たり、「自信やモチベーションの向上、前向きな気持ち」が得られたりしたことで、「構造がよく」、「スーパーヴァイズを通して擬似的なクライアント体験が出来た」ことは、心理療法を受ける体験と酷似していると言えよう。

総括すると、スーパーヴァイザーの職業的発達の指標である「自他の気づき」「自律性」「モチベーション」は、教育的な学びと心理療法的な面接を受けることに類似した体験によって促されると言える。

### 2. スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーの認識の違い

馬場(1997/2001)は、「心理療法のスーパーヴィジョン：それは教育なのか？管理なのか？治療なのか？」という Ekstein の論文のタイトル



を挙げ、スーパーヴァイザーの役割には、教育、管理、治療の3つの側面があるとしている。そして、管理の役割は、心理療法全体の流れを見守り、必要に応じて医療機関の紹介、方針の変更、担当者の変更などを勤めて、クライアントとスーパーヴァイザーを守ることだと馬場(1997)は述べている。今回の調査結果において、管理の側面はほとんど挙げられていない。スーパーヴァイザーが管理として意識していても、スーパーヴァイザーは管理されているとは意識しないという両者の認識の違いによる結果かも知れない。馬場(2001)は、スーパーヴァイズをする際に治療的態度を取らないように心がけている場合でも、スーパーヴァイザーは心理療法の意味合いがあったと捉えているし、治療者の基本的態度について意図的に指導した自覚はなくても、スーパーヴァイザーが自らそれを学ぶと述べている。スーパーヴァイザーが意図することと、スーパーヴァイザーが受け取るものには、認識の違いがあるようである。また、管理とはクライアントとスーパーヴァイザーを守る役割であると馬場(1997)が述べているが、スーパーヴァイザーは、管理ではなく守られていると認識しているのかも知れない。小笠原(2006)は、自らがスーパーヴィジョンを受けた体験を振り返り、「ヴァイザーよりクライアントを守りクライアントの成長を支援してもらったのと同時に、セラピスト自身もヴァイザーにより守られているという感覚を得られた」と述べている。

### 3. スーパーヴァイザーの発達段階と個性に即したアプローチ

平木(2009c)は、Bernard&Goodyearの弁別モデルを紹介して、スーパーヴァイザーの役割・機能は、教師、カウンセラー、コンサルタントに分けられるとし、「新人の初期S Vにおいてはトレーニング的要素が強調され、資格を取得し経験を積んだセラピストのS Vではコンサルテーショ

ンの要素が多くなることが想像される」と述べている。鑪(2001/2004)も、スーパーヴァイザーが初心者の場合、クライアントーカウンセラー関係全体を包むようにスーパーヴィジョンが行われ、経験者の場合はコンサルテーションとしての関わりが増えると言う。今回の調査研究において、スーパーヴァイザーのコンサルタントとしての役割があまり挙げられなかったのは、大学院時代のスーパーヴィジョンつまり新人の初期のスーパーヴィジョンの体験について調査したためであると考えられる。スーパーヴァイザーがスーパーヴァイザーの発達段階に応じてスーパーヴィジョンを行った結果、初学者である大学院生に対してはコンサルテーションをほとんど行わないことになったのであろう。スーパーヴァイザーの専門家としての発達に応じて、異なるスーパーヴィジョンが行われるべきだということは、国内外の多くの研究者達が述べるところである(金沢,2006; 平木,2009a; Stoltenberg,C.D., & McNeil,B.W.,2010)。

今回の調査で、大学院におけるスーパーヴィジョンでの悪かった点としてあげられた「スーパーヴィジョンに関して不足があった」は、教育的な学びにおける不満と言えるが、不満の内容には、箕浦ら(2014)が指摘する通り、「スーパーヴァイザーのコメントが具体的すぎても抽象的すぎても不満であり、自分のあらためるべき点の指摘がなさすぎても、強すぎても不満につながる」等、正反対のものが多くあることから、スーパーヴァイザーによって感じ方の差があることが分かる。このことから、スーパーヴィジョンにおいて、スーパーヴァイザーの個性性を考慮した関わりが重要であることが伺われる。「クライアントは一人ひとり異なるのであり、同じ事例というのはない。それにスーパーヴァイザーも一人ひとり異なるのだ」と河合(2001)が述べる通り、クライアントと同様にスーパーヴァイザーも個別であり、一人一人個別に考えていかなければならない。

#### 4. 初学者にとってよいスーパーヴィジョンとは

恐らく、多くのスーパーヴァイザーはスーパーヴァイジーの発達段階と個別性に即してスーパーヴィジョンを行っているからこそ、スーパーヴァイジーにスーパーヴィジョンがよかったものとして体験されているのであろう。しかし、今回の調査で、悪かった点にも多くの記述があったことから、全てのスーパーヴィジョンがスーパーヴァイジーにとってよかったものになっている訳ではないし、よかったと感じられるスーパーヴィジョンの中にも悪かった点があったことは明らかである。そして、スーパーヴァイジーにとって、よくなかった体験が積み重なると、「スーパーヴィジョンを受けたことで悪影響があった」という体験になってしまい、「スーパーヴァイジーのその後の職業的発達を阻害しかねない」(箕浦ら,2014)。また、そればかりでなく、スーパーヴァイジーが、自身のセラピストとしての成長に関して、スーパーヴィジョンが妨げとなったり、役に立たなかったり、有害になったりしたと体験すると、スーパーヴァイジーが行う心理療法にもネガティブな影響が及ぼされることが明らかにされている(Gray et al.,2001)。スーパーヴァイザーが、スーパーヴァイジーにとってよかったと思われるスーパーヴィジョンを提供することは、スーパーヴァイジーの職業的発達とクライアントへの責任を果たす意味がある。

箕浦ら(2014)は、スーパーヴィジョン体験での悪かった点として挙げられた「スーパーヴァイザーの態度がいやだった」、「人としてスーパーヴァイザーと合わなかった」について、平木(2009a)が指摘する通り、多くの指導者がスーパーヴァイジーの訓練を受けたことがないため、また各理論モデル間の相互交流が少なく互いに対立・排除の姿勢を持っているためだと述べている。また、「スーパーヴィジョンをとりまく体制への不満があった」については、安定した構造に守られるシステムをつくるのが必須であると

し、「スーパーヴァイザーの権威の悪影響があった」については、「ヒエラルキーのある関係」(平木,2009b)であることを認識した上で細心の配慮が求められるとしている。「スーパーヴァイザーとかみ合わなかった」は、スーパーヴァイザーの側にスーパーヴァイジーが言いづらいことでも表明しやすい態度や雰囲気があり、表明された時に謙虚に受け止める姿勢があることで、修復の可能性があると述べている。

総じてみると、大学院における初学者によりよいスーパーヴァイズを行うには、安定した構造を作り、ヒエラルキーのある関係であることを認識した上で細心の配慮をし、スーパーヴァイジーが言いづらいことでも表明しやすい態度や雰囲気を持ち、表明された時に謙虚に受け止める姿勢であり、スーパーヴァイジーの個別性と発達段階に即したスーパーヴィジョンを行い、スーパーヴァイザーとしての訓練を受け、各理論間での対立・排除の姿勢を持たないこと、が求められるのであろう。そして、スーパーヴァイジーが教育的な学びと心理療法的な面接と類似した体験を得られれば、スーパーヴァイズはスーパーヴァイジーにとって、よかったものとして体験され、それはクライアントにも肯定的に還元され、スーパーヴァイジーの職業的発達も促すと言える。

#### 5. よりよいスーパーヴィジョンを行うために

スーパーヴィジョンは、スーパーヴァイザーとスーパーヴァイジーの関係の背後にクライアントという存在がいること、クライアントを守る必要がある、スーパーヴィジョンがうまくいっているかの指標もクライアントになること等、心理臨床の実践とは違う、と黒川(2003)は述べており、スーパーヴィジョンは心理療法の理論・技法とは異なる独自の理論と技法により成立していることが明らかになってきている(平木,2009c)。心理療法とスーパーヴィジョンは、若干の共通性はあるが、各々のトレーニングが必要とされる別々

の領域 (Stoltenberg & McNeil, 2010) であり、「セラピー経験はスーパーヴィジョン実践につながるだけでなく、スーパーヴィジョンを受けた経験もスーパーヴァイザーの指導力を保障するわけではない」（平木, 2009b）。

よいスーパーヴァイザーとは、「技術的に頼れる人であり、きっちり指導をしてくれる臨床経験のある人であり、スーパーヴァイザーのことをよく理解してくれる人である。そして、そのスーパーヴァイザーのスーパーヴィジョンのためなら、高い金を払っても受けたいと思う人である」と鑪 (2004) は述べる。抽象的ではあるが、そのようなよいスーパーヴァイザーになり、よりよいスーパーヴィジョンを行えるようになるには、どうしたらよいのであろうか。

鑪 (2001) は、心理臨床は一般論だけでなく個別性があるためにスーパーヴィジョンという学び方が必要とされるが、スーパーヴィジョン自体も個別性があるために、スーパーヴィジョン自体にスーパーヴィジョンが必要になると述べている。Stoltenberg & McNeil (2010) は、スーパーヴァイザーのトレーニングに推奨する2つの主要な構成要素として、(1) 概念上で啓蒙的なトレーニングから成っているスーパーヴィジョンの形式的演習、と、(2) 実習要素から成るスーパーヴィジョンの体験的なトレーニング、を挙げている。

よりよいスーパーヴィジョンを行うには、心理臨床の実践に長けているだけでなく、スーパーヴァイザーとしての訓練を受ける必要がある。心理臨床のために基礎的知識として、臨床家が人間の心の発達、心の構造、クライアント-カウンセラー関係、治癒のメカニズムを学ぶのと同じように、スーパーヴァイズをする上で、スーパーヴァイザーの心の発達と心の構造、スーパーヴァイザー-スーパーヴァイザー関係とそれがスーパーヴァイザーとクライアントに及ぼす影響についての知識を十分に身につけていかねばならないのであろう。また、心理臨床面接の実践的な訓練とし

て、我々が事例検討会、個人やグループのスーパーヴィジョン等を受けていかねばならないのと同様に、スーパーヴィジョンについても、それらに相当する研修を受けていく必要があると思われる。

## V. 今後の課題

心理臨床の実践とは異なる独自の理論と技法から成るスーパーヴィジョンを質の高いものにしていくためには、スーパーヴァイズのための教育と訓練が必要と思われる。しかし、日本において、スーパーヴァイザーの教育と訓練の場はわずしかない。臨床心理士の質の維持と向上を図るには、よりよいスーパーヴィジョンの機会を与えられるスーパーヴァイザーの存在が必要不可欠であり、そのようなスーパーヴァイザーを養成するための理論と訓練方法を確立していく必要があると思われる。

## 文献

- 馬場禮子 (1997). 心理療法と心理検査. 日本評論社.
- 馬場禮子 (2001). スーパーヴァイザーとスーパーヴァイザーの相互関係. 鑪幹八郎・滝口俊子 (編). スーパーヴィジョンを考える. 誠心書房, pp.42-51.
- Gray, L.A., Ladany, N., Walker, J.A., & Ancil, J.R. (2001). Psychotherapy Trainees' Experience of Counterproductive Events in Supervision. *Journal of Counseling Psychotherapy*, 48(4), 371-383.
- 平木典子 (2009a). 心理臨床スーパーヴィジョン 1 今、なぜ、スーパーヴィジョンなのか. *精神療法*, 35(1), 106-109.
- 平木典子 (2009b). 心理臨床スーパーヴィジョン 2 スーパーヴィジョンという指導の特殊性と普遍性. *精神療法*, 35(2), 105-109.
- 平木典子 (2009c). 心理臨床スーパーヴィジョン

- 3心理臨床スーパーヴィジョンの基本モデルとは. 精神療法, 35(3), 73-77.
- 金沢吉展(2005). 海外文献紹介“Psychotherapy trainees’ experience of counterproductive Events in Supervision”. 臨床心理学, 5(1), 158-160.
- 金沢吉展・岩壁茂(2006). 心理臨床家の専門家としての発達、および、職業的ストレスへの対処について：文献研究. 明治大学大学院心理学部附属研究所紀要, 4, 57-73.
- 河合隼雄(2001). 序. 鑪幹八郎・滝口俊子(編). スーパーヴィジョンを考える. 誠心書房, pp. i - iii .
- 川喜多次郎(1967). 発想法 創造性開発のために, 中央新書.
- 川喜多次郎(1970). 続・発想法 K J法の展開と応用, 中央新書.
- 黒川嘉子(2003). 心理臨床家教育におけるスーパーヴィジョンの方法と成果に関する多角的検討. 東山紘久(代表). 平成12・13・14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書.
- McNeil,B.W.,Stoltenberg,C.D., & Romans,J.C.(1992).The Integrated Developmental Model of Supervision:Scale Development and Validation Procedures. Professional Psychology:Research and Practice,23,504-508.
- 箕浦亜子・田淵尚子・井出尚子・上村恭子・小海富美代・須佐祐子(2014). 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究(2)大学院における心理臨床教育としてのスーパーヴィジョンに求められること：スーパーヴィジョンでのよくなかった体験の質的分析より. 明星大学心理相談センター研究紀要多摩心理臨床学研究, 8, 13-26.
- 小笠原幸子(2006). スーパーヴィジョンを受けることから得られたもの—イニシャルケー
- スの体験より—. 心理教育相談センター年報, 14・15, 27-33.
- 小此木敬吾(2001). スーパーヴィジョン—精神分析の立場から. 鑪幹八郎・滝口俊子(編). スーパーヴィジョンを考える. 誠心書房, pp.13-41.
- Stoltenberg,C.D., & McNeil,B.W.(2010). IDM SUPERVISION:An Integrative Developmental Model for Supervising Counselors and Therapists third edition. New York:Routledge.
- 田畑治(2005). スーパーヴィジョンを研究する. 藤原勝典(編). 現代のエスプリ別冊：臨床心理スーパーヴィジョン. 至文堂, pp295-302.
- 鑪幹八郎(2001). スーパーヴィジョンの意義と課題. 鑪幹八郎・滝口俊子(編). スーパーヴィジョンを考える. 誠心書房, pp.3-12.
- 鑪幹八郎(2004). 鑪幹八郎著作集Ⅲ心理臨床と倫理・スーパーヴィジョン, ナカニシヤ出版.
- 上村恭子・小海富美代・井出尚子・箕浦亜子・高下梓・田淵尚子・須佐祐子(2013). 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究(1)日本語版スーパーヴァイザー職業的発達尺度作成の試み. 明星大学心理相談センター研究紀要多摩心理臨床学研究, 7, 7-15.
- 山中康裕(2009). 深奥なる心理臨床のために—事例検討とスーパーヴィジョン—, 遠見書房

---

Professional Development of Psychotherapists（3）

－ What is demanded in supervision as the clinical psychology education in the graduate school : The qualitative analysis of the positive experience in the supervision －

IDE, Naoko

Center of Clinical psychology, Meisei University

TABUCHI, Naoko

Center of Clinical psychology, Meisei University

MINOURA, Aiko

Center of Clinical psychology, Meisei University

UEMURA, Kyoko

Center of Clinical psychology, Meisei University

KOKAI, Fumiyo

Center of Clinical psychology, Meisei University

SUSA, Yoko

**Key Words** : professional development of psychotherapists, supervision to the abecedarian in the graduate school, the positive experience in the supervision.

---